



“お外で遊ぼう”
6歳 アメリカ

幼年美術

600

2019 3月号

発行所 大阪府東大阪市長田中4丁目6-3
ぺんてる(株)大阪支社内
全国幼年美術の会 〒577-0013 ☎(06)6747-1601
発行人 木代喜司
年間購読料 3,000円 1部300円(送料込み)

第48回 世界児童画展 作品より



“キャベツ たべたいな!”
5歳 福島県



“お話の絵「あまがえる りょこうしゃ」”
5歳 秋田県

巻頭言

先生方への現代美術鑑賞のススメ

以前、私が親しい園長先生が所属する保育園にて、5歳児への美術館鑑賞というイベントを企画したことがありました。しかも、その展覧会は現代美術の企画展でした。

先生方のなかには、子どもたちが静かに作品を観ることができたのか、現代美術の鑑賞などできるのか、といった声も上がりましたが、園長先生は子どもが本物を観ることの大切さを重視し、鑑賞を決定しました。私も同行し、子どもたちがどのような反応を示すのかということも期待していました。結果は、先生方の美術館鑑賞マナーについての指導が功を奏し、大人も顔負けするほど行儀よく、マナーをしっかり守り鑑賞していました。

しかし、ここで述べたいことはマナーの問題ではありません。作品を鑑賞するときの、子どもたちと先生方の反応です。先生方は現代美術ということもあり、何を表現しているのかわからないと、最初から先入観をもって鑑賞している様子でした。一方で子どもたちは、「わあ色がきれい!」「○○の形に似てる!面白い!!」などの意見を出し、作品鑑賞を感覚的に楽しんでいる様子でした。

先生方も子どもの視線で現代美術を鑑賞してみてください。色でも形でも、まずは自分の好きなように観て、作品との距離を詰めていくことが大切です。それからその作品の意味を考えていけばよいのです。作品を感覚的に観ることの大切さを子どもたちに教えられたイベントとなりました。

第2回石川幼年美術の会・実践研究会

2018年10月27日(土)、金城大学笠間キャンパス(白山市)において「第2回実践研究会」を開催しました。参加者は124名でした。「実技研修」「特別講演」「絵を読む会」「世界児童画展」が参加者一人ひとりの心の中でつながり、幼年美術の会の精神を実感できる一日になりました。

■実技研修
「ゆびえのぐを遊ぶ」(90分)

講師：大塚義孝先生(公益財団法人 美育文化協会・ぺんてる株式会社 社会教育普及担当)

乳幼児にとっては全てが「初めて



の体験」です。知らない物事に興味を示し、それがどのようなものなのかを確かめ知ろうとします。五感を働かせ探索している中から遊びが生まれます。子どもは何を感じ、何を楽しみ、何を試しながら遊んでいるのでしょうか? そのようなことを意識しながらダイナミックに造形遊びを楽しみました。

■特別講演
「こどもの真実に寄り添う造形活動 ―保育改善の視点とヒント」(90分)

講師：大橋功先生(岡山大学大学院 教育学研究科)

参加者の声を紹介します。

○子どもの絵を通して子どもを知る、保育を見直す、子どもの表現にはすべて意味がある、ということを実感しました。

○一貫性のある実技・講演で、今後の自分の造形活動の参考になった。現場にいると「自由な表現を受け入れたい」という自分の思いと「見栄えの良い作品を」という周囲や保護者の思いとの間で板挟みになってしまう。このような研修や研究を通して説得力のある知識を身につけて周囲を納得させられるように、子どもたちの自由な表現を認めてもらえるようになっていくと思う。

○大橋先生の講演で「子ども」「ひとり」「ひとり」



がそのかけがないの《じかん》をみんなで《いきる》ことを私たちは大切にしてきたか? という言葉が心に響きました。今を一生懸命生きる子どもたちが自分の思いを絵に表現すること、本当に大切にしていきたい《じかん》です。

■絵を読む会(160分)
「子ども絵から保育を語る」

「絵を読む会」をやりたい! それが、昨年石川幼美を設立したいちばんの理由でした。前回「第1回実践研究会」では、「絵を読む会」未経験の私達のために京都幼美の先生方6名が駆けつけてくださり、6つのグループの進行・助言を務めてくださいました。今回はその体験を踏まえて研修を重ね、「自家製」では初めての「絵を読む会」でした。スタッフ11人が勇気を出してファシリテーターに挑戦したことにより、1グループの人数が11人程度と話しやすく、聞きやすくなり、とても和やかな会になったようです。スタッフも参



加者も輝いていました。

グループで語り合うことにより多くのヒントを得ることができましたが、疑問も残りま

した。付箋に書き出し、特別講演の講師・大橋先生と石川幼美の森田が約40分かけて共有とまとめをしました。正解はありません。あくまでも「かもしれない」なのです。

このように「絵を読む会」を重ね、その文化が少しずつ根付き、誰でも気軽にファシリテーターができるようになることが次なる夢です。そうなれば、園内で日常的に絵を読み保育を語ることができそうです。

「世界児童画展」

3歳から6歳の子どもの作品80点を展示しました。



スタッフ秘話

特筆したいことはスタッフの成長です。「実践研究会」開催までの7か月の出来事を記しておきます。

2018年4月中旬、「第1回実践研究会」の参加者100名からスタッフを募ったところ、登録者は54名になりました。「第1回」の参加者27名の他に「参加していないけれどスタッフになりたい」という押しかけ希望者が27名いました。その思いを尊重し予想外の展開になりましたが、とてもありがたく心強いことでした。

◆第1回スタッフ研修会(5月)

46名が集まりました。子どもの造形表現活動について「学びたい」という思い、戸惑いの声も拾いながら、研修のあり方・内容・方法などを考えかたちにし、地域や所属を超え、楽しく、ともに学び合うことのできる場を目指すことにしました。「実践研究会」当日だけではなく、そのプロセスに大きな意味があるので、楽しい実技研修に続き「絵を読む会」について学び合いました。「第1回実践研究会」参加者の体験、当日の各グループの記録をもとに、スタッフがいずれファシリテーターをできるように、京都幼美の先生方6名が大切にされていたこと、方法などについて語り合い共有しました。

進行マニュアル(案)を作ることになりました。

◆第2回スタッフ研修会(7月)

実技研修に続き、進行マニュアル(案)に沿って実際に「絵を読む会」をやってみることになっていました。ところが、子どもの絵を持参する保育者が少なかつたのです。まずここで最初のつまずきがありました。絵がなければ「絵を読む会」は出来ません。

「初めてのこのこと」をする時にはイメージできないこと、戸惑いがあったり当然です。「なぜ持つて来れなかつたのか」を否定的に捉えず、不安や戸惑いの気持ちを聴きながら理由を探り、共有し、戸惑いながらも持参した保育者のクラスの絵を見ながら、とにかく「絵を読む会」をやってみました。なぜ石川で「絵を読む会」をやりたいと考えているのか、どんな会なのか、保育者自身が体験の中から感じ取ったようでした。ほとんどの保育者が「次回は絵を持参したい」とワークシートの感想を結んでいました。

◆第3回スタッフ研修会(9月)

スタッフ登録者は65名になっていました。スタッフであることの意味について再確認し、2回目の「絵を読む会」を行いました。ほとんどの

保育者が子どもの絵を持参し、「絵を読む会」の良さも実感できました。

◆第4回スタッフ研修会(10月)

第2回、3回、4回の研修を通して15名が「絵を読む会」のファシリテーター役を体験しました。それ以外のスタッフも絵を持ってこくること、絵を読むこと、絵を通して子どもや保育を語ることに少しずつ慣れてきました。回を重ねるごとに自然体にならざるを得ない「絵を読む会」の楽しさも分り、何とかやれそうな手応えを感じました。

石川幼美の登録スタッフは66名になりましたが組織はありません。「できる時に、できる人が、できることを」率先してやり、それを繋ぐのが現在の「チーム石川」のスタイルです。園の行事などと重なり「実践研究会」に参加できないことが分かっていく保育者も「スタッフ研修会」に参加しています。多忙でありながらも学びたい人たちの集まりです。「実践研究会」当日、案内に立ったのはスタッフではなく(参加者である)学生達でした。「世界児童画展」の展示は美術学科の学生がしました。「上から言われて」「指示に従って」動くスタッフ、「行かなければならない」研修ではなく、学びたい人が自らの意思で集まり、参加

者一人ひとりが主体となり「創り上げる」会を目指しています。

スタッフ二人が自身の変容について次のように記しました。『第4回スタツフ研修と実践研究会当日のフアシリテーターをして、自分がスタツフというよりは「みんながスタツフ」「みんなの中の一人」という気持ちで芽生えました。来年はまた他の保育士を誘って参加し、その「みんなに伝えたい気持ち」が伝染していくといいなと思います。』『初めは実技研修が楽しみだったけれど「絵を読む会」の方がもっと楽しみになりました。園内でも出来たら、と思うようになりました。』伝えたいことが確かに伝わっています。

他の地域から遅れること半世紀余り、石川ではようやく小さな芽が出たところだと思います。大切に育てていきたいと思えます。そして、県内各地域の保育士会など主導で行っている研修や園内研修などと有機的に結びつき、刺激になり、石川の保育者が主体的に、楽しく、互いに学び合う文化が生まれることを願っています。

末筆になりましたが、石川幼年美術の会設立以来ご支援いただいている多くの方々に感謝申し上げます。

次回は2019年10月26日(土)に開催を予定しています。



2019 Spring 21号 目次



公益財団法人美育文化協会の季刊誌『美育文化ポケット』21号(2019 Spring)が刊行されました。是非ご購入をお待ちしております。

- | | |
|---|--|
| 1 感性を育てるこどもの歌
早川史郎 | 34 practice |
| 2 pocket interview
佐伯 眸 さん
認知心理学者 | 34 実践ポケット【保育園】
発見からのアート
探検から広がる自分だけの世界
黒崎夕奈 |
| 10 curriculum design
カリキュラム・デザイン⑨
特集 つないでニヨロニヨロ
榎 英子 + 馬場千晶 + 秋山道広 | 36 実践ポケット【幼稚園】
ひらめきをカタチにしていく
深田美智子 |
| 18 curriculum design
こどもと先生のおどろくばこ | 38 実践ポケット【小学校】
つながれ！ 空気のかけ橋
大櫃重剛 |
| 20 biiku-navi report
美育NAVI訪問レポート⑩
「くすのき団地」の日々を紡ぐ
桃陵保育園 京都府京都市
ナビゲーター：羽溪了 | 40 exploration in to the art of infants
連載 幼児造形の森⑤
紙を折る フレーベル第13恩物と第18恩物
水島尚喜 |
| 27 art in life | 41 word for children, word for art
連載 こどものための、アートのための言葉⑧
「個性」佐藤賢司 |
| 28 連載
0・1・2歳からはじまる造形①
春に気づく 磯部錦司 | 42 drawing & painting こどもの絵を聴く |
| 30 連載
図工室訪問①
昭島市立つつじが丘小学校 渡邊裕樹 | 42 【幼児の部】 清田哲男 |
| 32 連載
アート in WORLD 海外の美術教育事情①
カンボジア 鈴木光男 | 43 【小学生の部】 岡 照幸 |
| | 44 Q&A
連載 こどもが育つ造形Q&A
大橋 功 + 西村徳行 |



あとがき

今年度最後の巻頭言は、矢野先生です。幼児の鑑賞実践のお話しを紹介くださっています。大変興味深く読みました。特に興味深かったのは、現代美術の作品鑑賞にあたって、先生と子ども達との鑑賞するその様子の違いです。先生方は、具体的に何が描いてあるのか分からないので、戸惑われていたのでしょうか。一方子ども達は、感覚的に「面白い!!」「きれいな色!!」「〇〇の形に似てる!!面白い!!」と純粹に作品そのままから感じる世界を楽しんでいるという違いです。

こどもの描く絵で描かれているものが、具体的に何であるか分かる絵は安心し、そうでないと、分かる絵を描くことには「上手」とか「凄い」と誉め、そうではないことには「..」となる先生。先ずは先生達も、純粹に色や形の面白さや鮮やかさを楽しみ、そこへ表現の価値観を動かしてみませんか？との矢野先生からの貴重なメッセージが込められているようです。

昨年度から北陸の地に、地区幼児を立ち上げられた、森田ゆかり先生から、石川幼美の名乗り組みをご紹介いただきました。幼美を名乗る上からは、当然と言えば当然なのですが、設立に当たって、「絵を読む会」を活動のど真ん中におこうとされ、発足後も、その研鑽を積み重ねています。秋の実践研究会に先駆け、何度も開催されるスタツフ研修会(これも素晴らしい)で「絵を読む会」の研修をさせていただきます。その目的として、「絵を読む会」を重ね、その文化が根付き、誰でも気軽にフアシリテーターができるようになることが次の夢です。そうならば、園内でも日常的に絵を読む保育を語ることができそうです。と、きちんとその方向性を定め、実践を重ねておられます。「絵を読む会」を行わずして、幼美を語る資格なし」を、身をもって示していただいています。そしてその参加スタッフが全て現役の方々、つまり若い方々でなされているところが、各地で幼美に関わる私達も傲い学ばねばならぬと反省させられます。奇しくも先月の常任委員会で、木代会長が仰った、「指導ではなく、共に学びあう姿勢」、そういう幼美の研修の姿を改めて心がけていきたいです。

(編集担当 羽溪)